

真 生

第 二 卷 三 月 號

□眞實の自己を看、眞實の自己を知ること、世に之ほど尊いことは無い、然乍眞實の自己を知ることには甚だ困難なことである。

□何の爲めの人生であるのか、此の身を愛するは何の爲めか、此の財を思ふのは何の爲めか、あらゆる名譽も財寶も凡ては自己の爲めではないか。自己を離れて何の人生ぞや。

□然るを世人ともすれば自分の爲めの肉體と自分の爲めの財とを知らず、反て之等に使はれて眞實の自己と眞實の價値とを忘れてゐる。そこには永遠の生命はない。

□如何なる名譽も財寶も凡ては自己の爲めではないか、自己を離れて何の人生ぞや、眞實の自己を知らずして眞實の生命が何處にあらう、そこには價値の生命がない。

□眞實の自己を知り眞實の自己を看よ、自己は宇宙と共ではないか、自分は如來と俱ではないか、其處に眞實の生命があり、そこに眞實の生活がある。永遠の自己を看よ、眞實の自己を知れ！ (念)

眞生

第二卷三號

眞

生

念死念生

○我々の一生は火の點いてる蠟燭の様です。
 ○ある蠟燭は五厘蠟燭の大きさで生れて来て居り、或る者は百斤蠟燭の大きさで生れて来てゐる。そして或者は俵夫の提灯の中で一生を終り、或者は便所の隅で燃え切て了ふ。又或者は佛壇で、或者は書齋で。
 ○未だ一分間位は大丈夫だと思つてゐる内にドロドロと尻の方から溶けて亡くならねばならぬ、此塵管は無かつたと騒いでも蠟燭は自分で自分の長さを知らぬ。なんでも俺は一錢蠟燭位いらしいと知つて、それでは命の終らぬ内にと帳場と云はず勝手と云はず、或は店或は街頭へと馳り廻つたが、結局あせつた丈けで何處にも落付いて使命を果たし得なかつたと、愈々ともしび終るとき轉々周章の感に堪えぬものがある。
 ○我々の頭には既に火が點けられてゐる、光の大小や、軀の太い細いで今更ら直ちが分れるのでない、小さい者には小さい者の光りがある。自分も小さい發光體として無駄に光を遊ばせない事が肝要である。念々に死を自覺して其一々を立派な、意義ある死として行かねばならぬ。ソレが聽て眞の生である。
 ○念死念佛こそ眞生の念佛である、佛としての光りで此一本を終りたいと只管佛格に歸依し願求して行かねばならぬ。
 ○總ての闇を破碎する燈明として不盡であらねばならぬ。一本の蠟の燒盡と共に終るものでなく、一切のモノの衷に輝く不滅の光りとならねばならぬ。(尅子)

目次

| | |
|----------|-------|
| ○念死念佛 | 土屋 觀道 |
| ○見佛意義(二) | |
| ○法 悦 | 孝 三 |
| ○曙の光 | 顯 道 |
| ○私の信仰道 | 小幡 空越 |
| ○ある日の對話 | 岩 田 生 |
| ○「吾朋便り」 | |

難 信

■聖道門の教は戒定慧の三學を修して煩惱を斷滅して行くのだ。叡山の教に行詰つて下山した人は多かつた。そしてそれらの人々は悉く他力淨土の法門に本願の生道を得て初めて更生したのであつた。
 ■それは叡山を下りた人々のみが本當に他力淨土の法門をしつかり抱き占める事が出来たのであつた事を思はねばならぬ。
 ■本願を信じて往生を得る事は凡夫への福音であつたに違ない、けれども本願の力が餘りに偉大であるだけに案外に心易く人間に信せられないのだ、！易往無人！
 ■一方で信じやうと努力しながらその努力の蔭でいつでも疑つてゐるのが凡夫なのだ。
 ■最初から信じ切れる人、任せ切れる人は最も上根な人である。信ずる事は聖道門の教より一層困難な事だ一層の難行道である。
 ■「信ずれば得らるゝ」……そうだ、偏へに信じやう信じたゞけづゝ佛が自分に光つて来るのだ。お婆さんがシブ茶をおし戴いて呑む相がなつかしい。(顯)

見佛の意義 (二)

土屋 觀道

客、して見れば見佛論者の中にも随分あやしい人々も多いですね。乍然辨榮上人の光明主義は一種の見佛主義だと云ふではありませんか。そして多くの人々はあなたも其の一人だと思つてゐますよ。

主、私は人の宗教に就ては餘り多く云ふことを好みません。夫れは反て多くの誤解を生ずるものです。だから、夫れは宜しく其の人に就て聞くべしです。尙、私が私の云ふ意味に於ける光明主義者であり、又見佛主義者であるといふことは事實ですが、多くの人々の云ふやうな光明主義や見佛主義であるか、どうかは、考ふ可きであります。

客、でも、光明主義といへば皆辨榮上人の光明主義だと思ひ、又現に多くの光明會員もさう思つてゐるのではありませんか。而て、見佛主義と云ふことは従來淨土宗や眞宗では言はないことです。だから見佛主義とさげば今更らのやうに世人は驚いて、アナタ方を異安心者として嫌ふのです。是等に對してアナタは何と考へてですか。

主、私も嘗は非常に之等の誤解を恐れ、どこまでも其の誤解をとぎ、又誤解の起らないやうにと努めました。乍然今日では夫れも餘り心に留めません。而て夫よりも今や光明主義と云ふ名目を捨て、寧ろ各自が如來を中心として、眞に生ざると云ふことであるといふことに重きをおくやうになりました。此の意味に於て、眞實の宗教に活きる人々は皆之光明主義者だと云ふべきです。單に辨榮上人ばかりが光明主義者でもなく、見佛主義者でもないのではありません。尤も見佛と云ふことは、其の人々の信仰の程度にもよることであるが、少くとも佛を信ずることのできる丈には佛をも見ないことには何で夫れが念佛者でありませう。此の意味に於て、見佛といふことは、正に佛教信仰の中心問題であるのであります。世人ともすれば、自ら佛教信者であると云ひ乍ら、反て見佛の可能を否定すると云ふことは、之大なる誤りと云ふべきです。

客、然し淨土宗あたりでは餘り見佛といふことを言はないではありませんか。殊に法然上人に於ては見佛することを自分の柄でないと嫌はれてゐるではありませんか、然るに辨榮上人は到る處に見佛と云ふことを言はれてゐる、而てアナタの只今申されたやうな意味での見佛ならば私共にも何等の異存はありませんが、上人の見佛は今少しく偶對的な影像の觀佛を意味してゐられるではありませんか、繪像の三昧佛などをかけてゐるところは全くさうと思はれません。

主、夫れは其の人に於ける信仰程度の相違です、本來如來は絶對無限の三身一如の靈體でましますけれども、衆生救濟の方便法身には種々の相好も圓滿し給ふのです、だから其の色相にのみ捕はれる必要はありません、寧ろ之等を通じて如來の大慈悲に觸ればよいのです、佛を見たと申しても夫れが自分に信ぜられない程の見佛なら夫れは決して眞實の見佛ではありません、又自分勝手に眞佛と定めても夫れが眞佛で無ければ自己の本心が承知しないのです。所謂一つの迷信に過ぎないものであつて、若しも夫れが眞佛であるならば直に自己の本心に相應し夫れが佛であることが自から明らかとなるのであります、いは、自己の本心に宿りたる如來こそ即ち宇宙本心の大靈であります。

客、乍然可なり宗教者といはれる人々の中にも凡夫見佛の可能を否定する人々が多いではありませんか、而も淨土宗や眞宗に於て之を異安心かのやうに申してゐる人もあるやうですよ。

主、夫れは從來の傳統的既成宗教としてはさう云う風に教へられた點があります、けれども靜に宗意の安心起行の依て來たる處を考ふるに決してさうとばかりは定まつてゐません、寧ろ私共の見解によれば夫等の人こそ反つて宗意の安心にも相違してゐるかと思はれます。

客、然らば今少しく夫れを宗學上の方面から述べて見て下さい。

主、いや私は一體宗學といふ者を何處まで是認すべきかを考へてゐる一人でありませんが殊に僅かの宗意の見解を異にするといふ事により、夫れを以つて直に其の人を異端者の如く排斥せんとする事は其の人格上より見ても考へてせう、單に從來の信條に相違すると云ふ概念を以て信仰も無き輩が譯もなく直に之を排斥せんとする如きは最も慎むべき事とせう。殊に各人がどこまで先人と同じ信條によつて誤り無く其の信條を體驗し得てゐるか云ふことは實に大なる考究問題です。中には單に傳統的宗學にして學校や教習所で學んだ一種の概念を以つて其の人の眞劍なる宗教を難するが如きは實に非人格的小人の態度といふ可きです。而てかゝる人々こそ私共から見れば反て一種の無安心者であつて眞實の宗教を毒する事の最も甚しき者であります。而て斯る人々に限つて佛説や祖師の法語のみ引例して自己の體驗に至つては寸毫も語る所を有せない輩です。

客、して見れば祖師の法語などは用をなさないと云ふのでせうか。

主、いやさう云ふ意味ではありません、許より佛説も祖師の法語も或る意味に於ては大切ですが、寧ろ

之等の法語こそ反て凡夫の勝手に考へたことよりも多くの眞實を吾人に教へるものなのです、乍然只單に之等の法語に盲從して止まるべきではないと云ふことです、吾人はどこまでも更らに進んで自己自らの宗教の體驗にも進むべきだと云ふのです、然るに世には全く自己の體驗の宗教を忘れて、祖師の法語にのみ捕らはれて心を惱めてゐるといふことはむしろ哀む可きの至りです。

客、乍然未だそこまで體驗し得ない人々には之等の法語も亦きく可きではありませんか。

主、夫れは勿論です。私は夫れが凡て悪いと云ふのでは決してありません。乍然單に法語を丸のみに信するばかりでよいかのやうに考へてゐる人々に對して今一步自己眞實の宗教にまで進んで貰ひ度いと云ふのです。

客、然らば世人がアナタ方を見佛論者として難じてゐるのは誤つてゐるのでせうか、殊に凡夫に見佛は不可能であると論ずるのは間違つた考へてせうか。

主、尤も世人の批評が如何なる意味で見佛論者を批難してゐるのか、又如何なる意味で凡夫の見佛を否定してゐるかは彼等の批難の内容をきかなければ彼此言ふことはできませんが、私の信じてゐる意味での見佛や信仰に對して之を難する人々があるとするならば夫こそ大なる誤りであるといはねばなりません。

客、でも彼等の中には随分學者でもあり又相當の信者でもあると思はれる人々で之を否定し、惡罵してゐる人も多いやうですよ。

主、然し夫れは彼等の誤りです、尤も見佛したなどと云ふ人々の中には随分あやしい人々も多いので

すから世人がさういふ疑いを持つのも尤もです、私なども時には反つて之等の學者たちに賛成したい心さへ起る時があります、乍然如何なる場合にも見佛は不可能であるとか、私共の云ふ光明主義までも異安心かのやうに云ふ人があると又さうばかりではあるまいと見佛論を主張せざるを得ないのです。

客、でも、彼等は幾多の佛説や祖師の法語を以つて其の見佛の不可能を論じてゐるのでした。だから折角アナタ方のお話をまきいて見たいと思つていた人々もこんな話をきくと急に心を變じてアナタ方を排斥するやうになりますよ。

主、夫れは私も知つています乍然夫れは愛宗の念にかられたのでむしろ尊むべき人かも知れぬ。乍然凡夫見佛の可能といふことは已に佛説や祖師の法語の中にも參見し得ることであつて、之は決して異説でも新説でも亦異安心でもないのです。

客、然らば何して斯る二者の相違ができるのでせう。

主、夫れは多分觀佛と見佛との區別を混同して考へたからではないかと思ふのです。殊に凡夫主義、往生主義として從來の淨土教徒は教へられて來たのですから、我等如き凡夫には見佛などはなし得ないものである。又往生は去來死後に屬するものであつて今世から光明を感得するなどは以つて外のことであるかのやうに云ふのです、乍然果して宗教はそんな未來主義なものでせうか。又夫れが果して眞實の淨土教であるでせうか。彼等は現に淨土教徒であり乍ら反つて淨土教的眞實の見方を忘れて聖道門の見解に墮し、如來の願力を見ることが弱いのです。只單に衆生の機根の方のみを見て如來大悲の本願を見ることが無いのです。乍然今こゝに云ふ私共の見佛論に對する見方は全く之と反して衆生の機根を見

ること下劣なりと雖も如來の願力を見ることが更らに大なるが故に衆生凡夫の見佛を許すのです、諸佛如來は法界身なり衆生心想の中に入り給ふなどあるが如き、其他衆生佛を見たて奉らんと願すれば佛即ち念に應じて衆生の目前に現前し給ふとあります。現に法然上人が念佛三昧によつて見佛し給ふたと傳へられ、又光明生活をせられた事は疑いなき事實であつて十方世界を照し如來の光明が念佛の衆生を攝取し給ふといふことは宗門の人々の決して疑ふところではありません。而も之凡夫自身の所行にはあらずひとへに如來大悲の願力によることだから他力の行と云ふべきです、これ見佛と觀佛との誤りから來た事柄であつた此の誤解は宗乘に不眞面目なるより來たる宗學者の罪であります。況んや、見佛を直に觀佛なりと斷定するが如き考へは最も慎しむべきことではなからせうか。只自分丈の誤解ならば未だしも延ては自己の周圍を誤り、併せて宗門興隆の一大障害となるといふことは自ら知らざるの罪とはいへ大に懺悔すべきことではなからせうか、然乍ら世人が見佛と觀佛とを混同して誤り易いのは無理からぬ點もあります。夫れは、善導大師觀經の疏に於て念佛三昧を以つて凡夫往生の正宗とせられ、法然上人が觀佛三昧を捨て念佛往生を以つて開宗の中心とせられたので其後の人々が觀佛三昧を排して念佛三昧を修するに至つた、然るに茲に誤り易きは觀佛を見佛と見るの誤りである。見佛は必ずしも觀佛ではない、尤も觀佛三昧によつても見佛は出来る。然乍ら夫れは主として自力觀佛の行なるが故に普通下劣の凡夫には到底不可能の事である。乍然、念佛三昧は彌陀の願力に乗ずるの行なるが故に見佛必ずしも不可能ではないのである。

果して然らば世の多くの人々が見佛否定をなす事は此の意味を取り違へてゐるからの事ではなからう

か現に佛を觀ずることを我機にあらずと嫌はれた法然上人にも「我れは只佛にいつかあほひ草心のつまにかけぬ日をなき」と見佛の要求寸時も斷たせ給はなかつたといふ事は世人の疑はない所であらう。否專修念佛と云ふことが即ち見佛の要求のあれではないか、此の見佛の要求あればこそ念々常住に念佛も相續せられるのである。尤も見佛といふことはそこに無限の深さがある、故に如何なる程度の見佛であるかといふことは更らに考究すべき所ではあるが已に觀佛を嫌はれた上人にして見佛の要求止むことなく、而も六十六にして親しく見佛せられたといふとは即ち念佛三昧によつて見佛せられた證據ではないか、之をしも尙世人は見佛否定の論據に立つると云ふならば夫れは上人を無視するものと云ふべきです。尙序でだから申すのではありますか、光明主義といふことも決して法然上人の宗教と異なるものではないのです。否むしろ上人平生の眞實生活に歸り如來の慈光を中心とせる宗教生活を高潮するに外ありません。何故に私共は死後の往生のみを説かねばならぬのでせうか、上人は夫れほど死後を急かれた方ではない、而して現代も亦夫ほど死後を恐れてはいない、否寧ろ夫れよりも現代は此世より永遠に慈光中心の眞實生活を望んでゐる。いは、時代は此土を捨て、彼土に往き、此の身を捨て、彼土に往くと云ふよりも如來の光明を此土に願ひ、如來慈光を此の身に體現しやうと願つてゐる。封建時代の宗教や教説は今や此の土に棄てられて吾人は此土より永遠に、否此土よりと云ふよりもむしろ此土に於て如來を中心とせる慈光生活を希求する所のものではないか、如何に此の世を厭へはとて此土を捨て、西方に往き此身を捨て、死後の淨土を急ぐにはあまりに我等に於ては早過ぎる。我等は宇宙の一員として、如來一子の佛子として如來中心の眞實大道に立たん事之を眞人の生活ではないか。

稱ふればこゝにのみながら極樂の聖衆の數に入るを嬉しき

月かけのいたらぬ里はなけれともながむる人の心にぞすむ

之が法然上人の生活であつた、此のながむるとは即ち如來を信する姿である、如來を信するところそこに如來の我が心の中に宿し給ふのを見るのである、如來の宿し給ふところそこに見佛が成せられ、これから出づる日常の生活が即ち宗教の生活である。

世人は見佛せずとも私を信すれば不安はないと云ふかも知れぬ、法然上人は六十六歳での見佛である乍然夫までと雖も何等の不安はあらせ給はなかつた、故に見佛必ずしも要とするには足らないと或は云ふ人がないとも限らぬ、乍然之は一を知つて十を知らない淺見である。もとより私共の信仰には信佛の心が第一である、乍然信仰の生活は單なる信佛に限るべきものではない、否更らに之よりこそ更らに無限に向上して如來の心を心とする眞實眞人の生活にこそ立つべきでないか。故に出来ることならば此上にもに如來に見え、如來の如くに生きんこそ心ある眞人の正に來るべき當然の願ひである。斯くて見佛は人類向上の一大要求であつて、見佛なきところに眞實の宗教はない。又見佛なき生活に眞の生活はない。見佛には無量無限の深さこそあれ私共にむしろ常住見佛さへ主張するところである。而て若し嚴密に見佛の意義を云ふならば私共に於ては見佛せずしては眞實の入信さへあり得ないことだと思ふ、而して見佛するところ即ち信佛であり、信佛する所即ち見佛ではないか。此のところ最も吾人の考究を要するところでありませう。

法悦

孝 三

土屋上人前

私は何等の力ない事を認めました、今は只阿彌陀様に縋り付くより外方法の無くなつた事を非常に喜と致して居ります。

貴方が仰せられた……「病氣をしたのとしなかつたのと後から考へて見てどれ丈の差がありませう若しかすると病氣した事が反つて進歩した立場になるかも知れない……」との御言葉が今しみじみと味れます、病氣をした事が私は今確かに感謝を抱いて居ります、如來様の思召ならばまだ病氣が重くなつても決して不服は申しませまいと存じて居ります、如來様の御意志がなければ存在の出来ない私共ですもの、私が今少し悪くなる様に努力しましても所詮無駄な事と信じます、是の總ての事を如來様に歸する態度は只單なる諦らめから來た事ではありませぬ、如來の大愛を信ずれ

な革命でした、自分の力の何等値ない事が認められた時私は最早何等の思案もなく如來様に打纏るより方法がありませんでした、是態度は本當に溺るゝ者の藁をも掴むの態度であつたかも知れませぬ、然し是の溺れかゝつた事は大なる如來の恩寵でした、是の溺れる事がなかつたならば自我の強い私には心の底から眞に佛を信する事は容易に出来得なかつた事と存じます、……三心を具した念佛が全くなかつたとは思ひませぬ、けれ共業の深い私は三心を具した念佛は仲々長くは續きませぬ。従つて時には自分は逆も駄目だと失望を感じる事もあります、其の度に「眞生」にありました様に佛は吾々が見るのではない佛が姿を現はして下さるのだ、如來を見る其事も佛のお力でなければならぬと云ふ事を思出して只管に念佛して留りませぬ、私はどうしても佛に見え申さねばなりません、

南無阿彌陀佛 合掌

【附】 是は病床に強く生きてゐられる孝三氏の上人にてられた手紙の一部です特に同氏の御許を願つて病床での御内慮を載せさせていただいたのです。(編)

ばこそ是安心が來たのです、然し私はまだ證信は得て居りませぬ、従つて私の信仰には時々疑問が浮いて参ります、其時は只管に念佛申して如來様のお力に縋る様に致して居るのです、如來様が無量壽無量光であらせらるゝとは兼ね〜お聞して参りました、けれ共疑深い私には是を信すると云ふ事が仲々困難の事です、信じ様とは勉めますが信せられないのです信じ様として信せられないのは随分苦しい事です、然し自分に何等の力ない私にはどうする事も出来ませんでした、然るに私の自我の強い事も然も其の自我が何等の力を有しない事もしみじみ〜知る期會が参りました、其は私が病氣の爲め苦しくて自分で自分の心を制し切れなくなつた時でした、此の時私は私の力でどうする事も出来ませぬ、此の儘で時を過せば氣が狂ふのではないかと思ふ程不安は益々募つて参ります、その時私の心の底から理屈なしに南無阿彌陀佛と念ずる事が出来ました、總ての自我を捨てる事が出来ました、如來様はまだ私はお姿を現はしては下さいませぬでしたが是の事實は私には随分大き

曙の光

顯道

報身の崩壊！それは現在の俺に酌まれた苦杯なんだ。……それでは矢張り今までは嬉喜びだつたのか、木魚の手が鈍つて來た頃から俺の報身が薄雲の様に消えて行つた。その時「俺」がその代りに段々判切り見え出したのだ。俺の世界はあまりに鮮明に見え出した。俺は俺の瞬間の俺を見つめる事を軽率にしなかつたのだ。俺は一人ポツチな世界だ、温かい親の胸も篤い道朋の涙も俺の歩いて行く道とは程遠い距離にあるのだ、俺を理解して呉れてゐる程度に餘程深厚なN兄の涙もカッケ足がすれ合ふ位な感じしか響いて來ない、俺は俺を誤摩化し度くない、妥協したくない、俺は俺の一本鋒だ、俺の光で俺の世界を輝かさなくてはならぬ、それには餘りに俺の力が無力すぎる、俺には一人の味方もないのだ、俺の世界に這入つて來る者が一人もないのだ、いや來る事の出來ぬ様になつてゐるのだ、それは不可能な事なのだ俺の世界は俺

ね一人が生きて行かばならぬ様に出来てゐるのだ、伴連れが出来ないのだ、人間の生きて行く道は餘りに孤獨すぎる程孤獨なのだ、寂しい道行さだ、涙に濡れて血をかみしめて行く巡禮だ、なに？ 現實に充足だ、……そんな鈍漢に用はないのだ、あゝ、さうだ想ひ起す、あの暗い暗の夜に肌寒く吹き荒ぶ山をろしの風に呪ふ様な音をたてゝゐる藪影の露の野道を三四人が提灯に足元を氣づかひ乍ら凄寂な深い沈黙の中に棺桶を墓場に送つて行く時の様な、……さうした淋しさをしつかりと抱きしめて歩いて行くのだ、人間はこのつき詰めた深い自分の「孤獨」にまで見極める事を恐れてゐる様だ、さうして人間は酒や女の避難所許りを探し廻つてゐるのだ、本當に自分を見極める事の出来ないものに本當に落付きがどうして有り得るものか、「セメテ愛人だけでも妻だけでも……」と頼みを掛ける時が人間同志の世界でのサジの投げ終ひだ、この時失望と無力のどん底につき落される、初めて人間は總てを投げ出すのだ、そして大地にヒレ伏す、空くの孤獨と刀無さに痛感させられる、兩手指し

のべて叫ぶ人間の聲は只「あ、佛よ、」それだけだ、佛が初めて信ぜられて来る、信せずには居られなくなる、信じないでは生きてゐられなくなるのだ、佛のみが唯一の俺の味方であつた事に氣付かされる、(そしてみ佛はさうした觀念の世界を彷徨ふ歩いてゐる者をも始終見護つてゐて下さつたのだ)、自我が張り切れた時その幕と共に自我は大地に切り落される、そしてバツと光が指し込んで来る、祈りの中に報身は輝き初めるおゝやつと曙の光が拜めた様だ、報身の把握、報身の生現、そこに主觀的實動の生活が出て来るのだ。(二、十五)

私の信仰道 (三)

小幡 空越

以上の經驗は切實に人生の深い巡禮を思はしめました、今から思へば私に對する如來様の特別な御慈悲は限りなく感謝せずにはゐられません、それからは鈍り勝ちにも念佛相續いたしました、天地の法則として現はれて居る、生・老・病・死の四苦は如來様より賜はる精進への御警告でした、計ら

ずも京都より父母が五重相傳の知らせを呉れました、飛び立つ喜しさにも、商人の私は九日間の不在に對する店の仕事に心を碎き、遂に高樹院で岩井上人御講義を受けました、歸阪後は熱がありましても日を過ぐる中に私の生きる道は只商賣そのものゝ中のみある様に、生活がダラけて参りませ、念佛が生活から逃げて行きそうせず、それでも幼時よりの胸に滲み込んで居る、彼のかわやにて申す念佛が罪ならば

からめとられ彌陀の淨土へ

又は

念佛の數にはよらぬ信なれど

信には數に數のおほき念佛

これらは皆私の信心の綱でありました、求道の心はいつちも燃えついてまいります、信の道への眞面目と根底深く切り込んで居る私の行く道は、長い年月の間に色々な試練と戦つて、多くのものを産み出しました、三十六七年に渡る信のたどりに専修の勝利を得て正しく廿五年に當るのです。

茲に一昨年即大正九年八月でした小供の學校が

暑中休暇なのを幸に小供を連れて京都に避暑に参りました、其際母よりの話に「光明會」の事を聞き辨榮上人の人格に憧れ是非一度其光明會の御縁に遇ひ度且御指導を給はらん事を思ひました、丁度九月下旬に通知が参り其通知には本山で別時の期日が書いてあるのみで光明會の文字がありませんでした、依つて其頃商賣の方に一生懸命でありましたので家内が代りに何心なく京都に参り二日間其御縁に遇て歸阪しました、家内から聞いて實に残念に思ひ込みました、光明會と云ふ事が書いてあるのでしたら私は直ぐ來會するのでありますのに母も私の出京致さなかつた事を非常に残念に思つて居られました、越えて十年一月に母が下阪されまして意外な御話を承つたのです、兼てから憧れて居りました辨榮上人は昨冬十二月に御遷化になつたといふ事です、是非御縁に預りたいと憧れて居りました文にお目にもかゝらぬ中に御往生とは氣も張合も抜けて何とも申上げ様もありません、母も信仰に志して四十有餘年目に一昨秋上人の御縁で入信されました、私の家へ來られた時も

實に喜びに満ちて居られました、扱三月一日からの御別時には午前五時に我家を出て京都へ参り母と共に本山へ参りました、集りの人々は遠近を問はず猛烈な信者ばかりでした、故上人を忍ぶ御僧侶の方や俗家の方々が上下の隔てなく實に麗しい平民的な和氣で満たされて居りました、私には何が何やら勝手が判りません、片側の奥まつた方に笹本上人が會衆の御尋ねに對して御話をして居られます、私には聞くともなしに耳に辨榮上人御在世によくお話になつたと云ふ雞の玉子も親鳥に暖められると玉子はかえつて雛となつて現るゝ如く親鳥より轉げ出ぬ様に暖まらねばならぬと云ふ意味の御話でした、私は可憐な結構なしつくりと了解の出来るお話を聞いた事がありません、私は來會の初めに而もそのお話を承り是が故上人の御話であつたと思ひならべて私は其時に心の中で笹本上人を伏し拜んで居りました、其中に時間が参り會員は一同に三味堂へ入場しました、一切の事が私には物珍しく感ぜられました、靈前には故上人の御遺骨が安置されてあります、悲壯な氣分で満さ

ある日の對話

岩 田 生

れて念佛が初まりました、私の最初の直感私の想像を裏切つて光明會が見とめられました御念佛の申方が一種特別な風が有る様で、もしそれに奥義があるなら聞いて見たいものであるとも思ひました、その會座に列つて居りました私の伴はこの私の悶を色々と慰めて呉れました、私にはどうしても得心が参りません、只自分の思ひのまゝに念佛してゐたのでした、實はその時は別時念佛に關する事よりは主として故上人の御遺徳御行跡の話であつた様でしたので三味會の心持、又光明會の主義も私に判切りしなかつたのでした、一日過ぎ二日過ぎて行く中に今迄に經驗した事のない味ひを得たのであります。(續)

ちばん不幸な人だ」

甲「どうしてそれが不幸と云ふ理由になるのだい」

乙「まアそれはあとにして、君はいつたい佛様と云ふ方をどう思つてゐる？」

甲「佛様？それさあ、佛様はお寺の本堂におさまり返つて御座るし、俺ンとこの佛壇の中にもほこりまみれになつてゐる、アンナものは要するに未開野蠻な時代の人間共がこしらへた偶像だ、若き近代人の中にはそんな幻想に、はまり込んで居るやふな、お芽出度いのは居ないだらうよ」

乙「鋭鋒あたる可からずだね、！すると君はあの金色の佛像だけが佛と云ふもので、それは過去の遺物とでも考へてゐるのか」

甲「そうばかりとも思はぬが、……それは僕とても佛が宇宙に遍在するとか、悟ればどうか、迷へばかうとか、小さい時からいろ／＼聞いてゐるが、要するに一種の論議に過ぎない、活潑潑地の俺たちの生命には毫も觸れては居ない」

乙「……」

ハイン、又説教屋の空想談かと思つた計りだ、
乙「それぢア、佛様は無いとでも考へて居るのか」
甲「馬鹿にまた乘氣になつて、……よさうよ、そんな愚にもつかぬ話は、もつと興味のある文學談とか、それともどうだい、いちばん君の最近のロマンでも聞かうぢやないか、佛があらうが、無かろうが、未來や、天國がどうであらうが、そんな事よりも面白い現實に生きるが一等だ、
乙「待つた／＼。君は此の現實によつて充實されて居るのか、まじめに深く考へる時は現實は決して僕たちの心を充足させて呉れないのだ、たとへ戀愛事件にせよ、生命事件にせよ、生命問題にせよ、深く眞面目に考へて來ると永遠の問題になるのだ、行く先きは同じなのだ、ましてや之は最初君からのお尋ねぢやないか、いゝかい、それでは、とさつきの佛の有無から決めてかゝらぬと(救ひ)と云ふ事がわからぬ」
甲「おや／＼お説教かい、そんなら、俺も俺一流の考から君の幻想を破らう、勿論だ、佛なんかあるものか」

乙「どうしてまた」

甲「凡そ何でも實際と、經驗とを基としなければ駄目だ、見る事の出来ないものを俺は信ずる事は出来ない、第一此のせち辛い世の中に、あんな上品な物價の高底を知らぬげなのんきな顔しておさまり返つて佛なんて、有るとどうして考へられるものか」

乙「そんなら、君は此の間きみえさんの三年だとかどうして寺へお参りをしたのか」

甲「寺参りをしたのは俺の家の昔からの習慣なんだ、俺自身には信仰は微塵もないのだ、唯あゝ云ふみじめな死に方をしては妹も浮ばれぬだらう、とそれが俺には可愛想だから一所に拜みに行つた」

乙「浮ばれるとはどういふ事だ」

甲「樂になるぞ」

乙「樂になる事とは」

甲「樂にして貰ふのぞ」

乙「誰に？」

甲「おや／＼こいつ、ばかにするな、佛の奴にさ」

乙「佛の奴と云ふ言葉はない筈だ、樂にして貰ふお

方を、奴とは勿體ないぢやないか、あるとも無いともわからぬが、とにかくある様な氣持ちがするとても云ふのか」

甲「まアそんなところだ」

乙「今一いさだ、だからお寺参りする相手方の木像佛金佛は眼には見えぬ、そう云ふばかり知れぬ力を持つた佛様の假のお姿なので、佛様を拜んで有難いと思ふので實際拜む僕等の心持ちにあるんだ、心にしみ／＼亡くなつたさみえさんが可愛さうである、どうか樂にしてやつて下さい南無阿彌陀佛、と歸命する君の心持ちの中には、金色に光る金佛様を通して偉大な御佛の眞身存在を認めてゐる事になり、その御佛がさみえさんの亡靈を救ひ攝り下さるもの、と確信する、そうして初めて自分の心に慰安もあり、おちつきも出るのだ」

甲「死んだ者はそれで宜ろうが生きてる俺は」

乙「君も同様にきつと救はれる」

甲「何時から」

乙「稱念歸命すると即時に、又未來に、顯然として手に取る様にはないかも知れぬが、きつと救はれる」

甲「そんな佛様に救はれなくとも、俺獨特に自己と

救へばよいではないか自我宗だ自我を力強く擴大する事に努力する所宗教もへつたくれも不必要でないか」

乙「又君自我宗か、そう云ふものではないのだ、深く眞面目に突き進んでゐるかとする人、充足せられざる希望を抱く善い質の人にあつては、自我で押し通し切れやしな、むしろ一皮々々その自我の念を棄て、行かねば、そしてたへず永遠のものへ進まねばならぬ」

甲「……」

乙「自我では俺たちの渴望する永遠の愛も、永遠の戀も、生命も、把握する事は到底出来ない」

甲「何故またそんな風な考へ方をのみしなればならぬのか、自我を擴大し、實現するところ立派に安心も得られ、永遠の生命も得られるではないか、力は孤獨から生れるのだ自我から生れるのだ」

乙「そんなら、君は此の間きみえさんの三年だとかどうして寺へお参りをしたのか」

甲「寺参りをしたのは俺の家の昔からの習慣なんだ、俺自身には信仰は微塵もないのだ、唯あゝ云ふみじめな死に方をしては妹も浮ばれぬだらう、とそれが俺には可愛想だから一所に拜みに行つた」

乙「浮ばれるとはどういふ事だ」

甲「樂になるぞ」

乙「樂になる事とは」

甲「樂にして貰ふのぞ」

乙「誰に？」

甲「おや／＼こいつ、ばかにするな、佛の奴にさ」

乙「佛の奴と云ふ言葉はない筈だ、樂にして貰ふお

所もそれに以てはゐるのだが、又根本的に違つてもゐるのだ、君の自我は他を容れることの出来ぬ、君自身のみの自我の我であるやうだ、我の我はすぐにも行きまつの運命にあるのだ、決して擴大できるわけのものではない」

甲「然し此自己と云ふ觀念を棄てる事は始と不可能事ぢやないか」

乙「それが究極から云ふと可能なのだ、一切を棄て自己をさへ一旦棄て、たゞ佛を念ずるのみの自己となる自己を、佛の中に攝入して貰つて佛と一つになる、それから出なほして來る自己でなくてはならぬのだ」

甲「どうすれば一つになり得るのだ」

乙「御佛を信ずるのだ、念佛の境に身をつねに置くことだ、南無阿彌陀佛を稱念すること、若くば稱念してゐる心持の相續だ」

甲「あんなおまじないの様な六字

を稱へて、何で佛と一所になれたり永遠に對する眼覺めがあつたりするのか」

乙「理由はいらぬのだ、信ずるところに救ひがあるのだ、念佛しながら惡事を働くものはない、惱みをぬぐひ取り安穩な生活の態度、温いような性、永遠な深い愛、それ等を惠んで下さるに違ひはない」

甲「そう君のやうに五錢出したら焼芋十箇すぐ貰へるやうに思つてはならぬ、利益は微妙に働いて出る、きつとある、信じない先きから貰へそうもないから貰ふのはよさう、それが僕の最初から云ふ救ひの手の萬人の上にあつて、見えぬ人がいとしいと云ふのだ、まづ一向に信じて稱念すれば、眼に見えぬ利益は必ずあるのだそう云ふ心懸からもろもろの善事が出て來る、それから君の眞の自我が大きく育くまれる、愈々力強くなる」

進展止む無き創造力ある君ともな
り得らるゝのだ。

たゞ、
佛を信すること忘れてはなら
ぬ、何事も信じつゝ、ある努力す
るのでなくては大きな善い、そし
て正しい事は出来ない、
甲「僕にも、まア 大體わかつた様
だ何れまた話すことにしやう。」

吾朋たより

▽法月光二様より(静岡) 昨年先生にお誓ひ
申してからもまだ私は元のまゝの私にかへる
時があります、それでもヤケにはなりません
いつか持つと、救はれたと云ふ時の来る事を
堅く信じてゐますから私が先生を忘れない間
はキツトお念誦が私に生きて居ます。
▽淺野孝眼様より(名古屋) 愚かな私迄にも
如來様の靈化をお與え下さいましたので御座
いませふか此程中の私の實感は何かながらも
眞に南無阿彌陀佛と念じられた時其時此の儘
が向上の相にて今現に無限の世界へと進ませ
て頂きつゝある事を信じさせて戴きました。
▽水谷圓超様より(多磨) 御正月三日間こそ
ミオヤの御そばで寺のものと御念佛させて頂

名古屋の桑原様が奥様と御二人連れて今度は
御正月をこの如來様の許にてさせて頂きに參
りましたとの事に有難き勿體なきでうれし
くて、堪えられませんでした。

御案内

- 別時念佛三昧會
- 三月廿六日より三十日ま
で
- 會場 神奈川縣三浦郡浦
賀町吉井 眞福寺
- 導師 土屋觀道上人
- 申込三月廿日迄に眞福寺
宛

三浦光明會

誌代拂込芳名

○拾五圓 江崎觀隆様 ○參圓 岐阜圓心寺様、吉
川聖善様、吉水辨道様、水谷仁三郎様 ○貳圓小
鳥善順様、橋爪吾二郎様、名達隆次様、森島達誠
様、竹村清音様、○壹圓 金丸會一様、渡邊保三郎
様、石川良丹様、野村光圓様、中原正直様、江阪
あい様、中村なか様、眞藤龍太郎様、寺岡隆太郎様、

■霜雪に虚けられて居た若草が萌えて來まし
た頑固と執拗で意地張つてる礫の間を永い間
健闘して到々大地を喰ひ破りました。
■人間の生道亦此如してあります、不調和な
配在の中にもちつと強く立つて行ける人は本
當に強い人です哲人はこの時は血と涙を呑み
宗教人は甘露を呑みながら生きてゐるのです
■一年余り育てゝ來たこの愛する「眞生」は今
可成り難行道に曳ひ込まれて居ります皆様の
生きて行かれる道に抱込んで育てゝやつて下
さい。(顯)

編輯の後に

振替口座東京四七〇八八番眞生社
大正十一年二月二日第三種郵便物認可
大正十二年三月一日發行毎月一回一日發行
定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

編輯人 土屋 觀道
發行人 眞生
發行所 眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
東京市神田區駿河臺袋町一番地
東京市外西巢鴨町二七二番地
印刷人 原 子 廣 宣